Kobe Shoin Women's University Repository
KARASHI-DANE

ジョルジュ・バルビエとポショワールに関する一考察

著者	西川 良子
雑誌名	神戸松蔭女子学院大学研究紀要
巻	4
ページ	125-139
発行年	2023-03-05
URL	http://doi.org/10.14946/00002356

ジョルジュ・バルビエとポショワールに関する一考察

西川 良子
神戸松蔭女子学院大学人間科学部
Author's E-mail Address: y-nishikawa@shoin.ac.jp

A Study of George Barbier and Pochoir

NISHIKAWA Yoshiko
Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

ジョルジュ・バルビエは、アール・デコ期に多くの作品を輩出したフランスのイラストレーターである。1908 年にクチュリエのポール・ポワレがポショワールという手彩色複製法のイラストレーションによるファッションアルバムを出版して以来、この複製法はファッション誌において人気を博した。バルビエが頭角を現した背景には、ポショワールの発展に尽力した摺師のジャン・ソーデの功績が大きい。ポショワールは 20 世紀初頭のベル・エポックから進展し、第一次世界大戦の低迷期を経た後のアール・デコ期に多用されたが、機械印刷の発展と世界恐慌により、短期間でその役目を終えることとなった。本研究では、現存するバルビエやソーデの資料や文献をもとに、彼らのポショワールへの含意を理解することを試みた。ソーデがポショワールについての書籍を発行した 1925 年から 3 年後、バルビエは「Pochoir」というタイトルの雑誌記事を執筆し、北尾雪坑斎の画集『彩色画選』の研究について言及した。これはポショワール技法と類似した合羽摺の画集で、絵師と摺師、版元の組織の関係性が明記されたものであった。バルビエがこの画集を記事にしたのは、ポショワールとの技術的類似点を指摘しただけではなく、ポショワールのクオリティと人材を維持するための組織の重要性を提示するためでもあったことが読み取れた。

George Barbier was a French illustrator who produced many works in the Art Deco period. In 1908, couturier Paul Poiret published a fashion album illustrated with a hand-colored stencil printing technique called "pochoir" and this technique became very popular in the fashion press. Barbier's distinguished career was largely due to the work of Jean Saude, a printer who was devoted to the

Journal of Kobe Shoin Women's University, No. 4（March 2023）, *125–139*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要 No. 4（2023 年 3 月）, *125–139*.

development of pochoirs. The pochoir progressed from the Belle Époque in the early 20th century, and was used widely in the Art Deco after the doldrums of World War I. However, it soon came to an end by the innovative machine printing and the Great Depression. In this research, I attempted to understand their implications for the pochoir based on the extant documents and literature of Barbier and Saude. Three years after the publication of Saude's book on pochoir in 1925, Barbier wrote a magazine article titled "Pochoir", in which he referred to his study of Kitao Sekkosai's collection of painting “Saishikigasen”. The collection was made by Japanese stencil technique similar to the pochoir, and specified the relationship among the painter, the printer, and the publisher's organization. Barbier's article about this collection seemed not only to point out the technical similarities with the pochoir, but also to indicate the importance of the organization to sustain the quality and human resources of the pochoir.

キーワード：アール・デコ、ステンシル、合羽摺、ジャン・ソーデ
Key Words: Art Deco, stencil printing, Jean Saude

1. はじめに

ジョルジュ・バルビエ（1882-1932）は、アール・デコのファッション誌やグラフィックアートの世界で才能を発揮したイラストレーターである。当時、イラストレーターの地位は決して高いものではなかった。一点ものの芸術作品とは異なり、複製芸術は一度に多くの人の目に触れるが、その分記憶から消えるのも早い。一度使用されたものはすぐに忘れ去られるようなエフェメラ[1]の芸術と考えられていた。バルビエは、繊細で鮮やかで美しい描画を多く輩出していながらも知名度は低い。これは、評論や書誌などの「遺産」がほとんど存在しておらず[2]、バルビエを扱った研究が希少であるところに要因がある。Martrelli（2008）はヴェネチアで行われた初のバルビエの大規模展覧会においてキュレーターを務めたが、同展のカタログの中では、バルビエに対する世間の無関心を「unjustified oblivion（不当な忘却）[3]」と呈した。

バルビエは、イラストレーションの複製の手段としてポショワールを多用していた。バルビエらイラストレーターの作品の複製を手掛けたポショワールの摺師ジャン・ソーデは、自らを「ペインター」や「カラーリスト」ではなく「イルミネーター」と称した[4]。バルビエは雑誌の寄稿記事でソーデを「色摺りの巨匠」と呼び、ポショワール技法を「かつて達成できなかった完璧なレベルまで高めた」と述べた[5]。ソーデがイラストレーターの表現の場に大きく貢献したこの背景には、当時の低品質な機械印刷によって大量流通されるファッション誌の問題があった。Calahan, Zachary（2015）によると、新たなクリエイティブの創出を模索したクチュリエ（服飾商）や出版社は、労働集約的でコストがかかるポショワールという複製法を、エリート顧客向けの豪華な限定出版物として採用したという。このような高級定期刊行物は、フランスのファッションと趣味の基準を国内外のエリートに宣伝することにも繋がり人気を博すことになったが、これについて「ポショワールは、ファッションとアート

の新鮮な融合を提示し、ファッション・イラストレーションは真の芸術的表現のためのプラットフォームにはなり得ないという長年の概念に挑戦するものであった」と述べている[6)]。この結果、ポショワールは20世紀初頭のベル・エポックから進展し、第一次世界大戦勃発による低迷、戦後の復興を経て、アール・デコ期に全盛期を迎えた。最盛期には、フランスにある30以上のグラフィックデザイン事務所が、600人以上の職人を雇ってポショワールの彩色を行っていた。ひとつの工房が手掛けるポショワールのための筆は、絵の具の彩度と色の品質を保つため600本にも及んだとされている[7)]。その後、1929年に起こった世界恐慌からファッション業界が現代のテクノロジー時代に移行するにつれて、手描きのイラストは写真に置き換えられた。ポショワールの需要は減少の一途をたどり、バルビエの死と運命を共にするかのように終焉を迎え、その栄華が返り咲くことはなかった。

本研究では、手彩色という古典的な技法によって人気を博し発展したポショワールに着目し、歴史的背景や黎明、終焉を文献から紐解く。その手段として、ポショワールやバルビエの展覧会のカタログを参考文献とした。主に1988年にメトロポリタン美術館において開催されたポショワールコレクション展や、2009年にヴェネチアで開催されたバルビエの回顧展、2013年にトロントで開催されたバルビエ展のカタログなどを翻訳した[8)]。バルビエがポショワールに傾倒した経緯や変遷は、バルビエ自身が寄稿した雑誌記事や、ソーデの書籍から考察することを試みた。

2. ポショワール発展の背景

2-1　フランスにおける版画技術

ポショワールとは、彩色する箇所の形に切り抜いた型紙（紙、金属など）を支持体にあてがい、その上から絵の具を刷ることで穴を通して形を転写する彩色技法、もしくはその技法によって創作された作品である[9)]。日本では合羽摺、型紙摺などといい、18世紀初頭に登場したとされ、絵画のみならず着物の染色にも使われていた。英語ではステンシルといい、近年では英国においてバンクシー[10)]の出現によりこの技法によるグラフィティアートやスプレーアートがオークションでも高値で落札されている。

フランスでは、15世紀頃からポショワールの原点といえる型抜きによる版画が盛んであった。この技法は、日用品やトランプ、家屋に飾るための宗教画などに使われており、中でもフランス東部のエピナル地方は版画村と呼ばれ、精密で洗練されたショーカードや切り絵など、民族版画の特産地であった。金沢（1998）によると、この地方では、版画による彩色のことを「イメージ（imagerie）」と呼んでいたという。「画像」という意味を持つこの語源について、宗教的な絵画を特産品としていたことが挙げられる[11)]。この他エピナル版画は当時の情報伝達の手段として、新聞や雑誌のような役割を果たしており、行商人が地方に普及させていた。1796年にジャン・シャルル・ペルランがペルラン印刷所を設立し、以後は一族が7代にわたって版画をエピナルの花形産業にまで持ち上げていくことになった。

ポショワールは、エピナルの版画が進化してできた技法であり、彩色する範囲を型紙や金型などで切り抜き固定し、その中で色を重ねたり、模様をつけたり、厚塗りをして立体感を

出したりするユニークな方法であるが、18 世紀以降は合成染料の開発により色彩の幅が大きく広がった。

2-2　1900 年台のカラー印刷

ポショワールがアール・デコ期に発展した背景には、前述のとおり、カラー印刷精度の未成熟がある。1900 年代初頭のカラー印刷は 1700 年代の石版印刷を改良、発展させたクロモリトグラフという活版印刷（凸版印刷）方式が採用されていた。書籍や雑誌などの出版物やポスター、広告、製品ラベルなどさまざまなカラーの印刷物が大量に提供されたが、この時代のカラー印刷は製販技術や色の分析や分解が未発達で、現在のような 4 色フルカラー方式ではなく、10 色以上の特色（調色）を使用していたとされる [12)]。これにより色彩の表現が乏しく機械印刷特有の単調さがあった。機械印刷の普及で出版業界においては色再現の質が低下したが、ファッションの分野がいち早く反応しポショワールが見直された。ポショワールは、顔料を手作業で塗布するため、カメラや印刷機では決して再現できないまばゆい効果が得られた。合成染料の発展もポショワールの普及を後押しすることになった。

2-3　高級ファッション誌との融合

ポショワールの黎明をたどると、1880 年代に遡る。この頃の安価で迅速な機械プロセスによって作成された誌面は単調で静的なものであった。クチュリエであるポワレはこのような現状に甘んじることなく、ポショワール技法を使ったファッションプレートの発刊に乗り出した。ポショワールの持つ彩度と再現度の高いイラストレーションの可能性を、高級ファッションアルバムに託したのである。1908 年、ポワレのサロンで描かれたファッションアルバム『*Les Robes de Paul Poiret racontées par Paul Iribe*』が出版された。これはイラストレーターのポール・イリーブがイラストレーションを描き、イルミネーターのソーデがポショワールを手がけたものである（図 1）。3 年後の 1911 年にはジョルジュ・ルパップがイラストレーションを手掛けた『*Les Choses de Paul Poiret vues par Georges Lepape*』が出版されたが、イリーブ版が 250 部であったのに対し、ルパップ版は 1000 部、値段は 50 フランという高額で販売された（最初の 300 枚にはシリアルが振られている）[13)]。第二弾を担ったルパップは、イリーブの二次元的な技法を取り入れつつも、当時の背景画を参照しておらず、あたかも劇場にいるような感覚をもたらした（図 2）。ここでルパップが床面に採用した「チェッカーフロア」は以降のポショワールのファッションプレートに好んで使用されることになった。Calahan, Zachary（2015）は、「当時のファッション雑誌は、掲載されている服の色や素材、構造について詳しく文字で説明するのが一般的だったが、このアルバムは冒頭を除き、まったく文字が使われていなかった。（中略）鮮やかな色彩と流れるようなシルエットのモダンドレスをまとった女性たちが生き生きと描かれたファッションプレートには解説や説明の文言は不要だった。ポショワールはこれを機に商業イラストレーションをファインアートの域に押し上げた」[14)]。と述べている。このアルバム出版と同年に、クチュリエのジャンヌ・パキャンもポショワールを採用しエリート顧客のためのファッションアルバム『*L'Éventail et la fourrure*

図 1

図 2

図 1　Paul Iribe *Les Robes de Paul Poiret racontées par Paul Iribe*
出典：FASHION AND THE ART OF POCHOIR
図 2　Georges Lepape *Les Choses de Paul Poiret vues par Georges Lepape*
出典：FASHION AND THE ART OF POCHOIR

chez Paquin』を出版した。アルバムのイラストはポワレのイラストを担ったイリーブ、ルパップに加え、バルビエも参加しており、300 部限定で出版された。ここでバルビエもチェッカーフロアを採り入れている（図 3）。エルコリ（1992）によると、ポワレとパキャンのこれら 3 冊のアルバムはファッション誌の古い伝統を覆す高級ファッション誌市場に登場した「三大傑作」とされ、ポショワールは、これ以降飛躍的に発展したという。イリーブやルパップ、シャルル・マルタンと並び、バルビエは『*Journal des Dames et des Modes*』、『*Gazette du Bon Ton*』、『*Modes et Manieres d'Aujord'hui*』など次々に出版された富裕層向け高級ファッション誌でイラストレーターとしての名を馳せた。パリでは、芸術家たちがポショワールを受け入れ、その能力を誌面で発揮したため、ポショワールという新しいことばは共通言語となり得た。

図 3　George Barbier *L'Éventail et la fourrure chez Paquin*
出典：ジョルジュ・バルビエ画集 永遠のエレガンスを求めて

ファッション誌が当時の未成熟な印刷精度に甘んじず、ポショワールという古典的ながらも斬新な手彩色技法を採用することで、グラフィックアートとファインアートを融合した新しい文脈が登場し、かつてエコール・デ・ボザールで学んだ芸術家たちの舞台がここに設定されたのである。ポショワールは、リトグラフ、木版画、線画、またはエッチングによって作成された線画や画像と簡単に組み合わせることができ、彩色のための素材や場所を選ばないため、誌面のみならず、装飾品や建築物にも応用させ汎用性を広げた。

3. ポショワールについての記述

ここでは、ソーデとバルビエが記した書籍や記事にフォーカスし、ポショワールについて読み解いて行きたい。

まずはイルミネーターのソーデが 1925 年に執筆した『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』を紐解き、それを受けてバルビエが 1928 年に「*Arts et Métiers Graphiques Paris 3*」誌に寄稿した記事である「Pochoir」からバルビエの執筆意図を探る。

3-1　ジャン・ソーデの豪華書籍『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』

3-1-1　書籍概要と評価

1925 年に出版されたソーデの著書である『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』には、型抜きの型紙や金型（パトロン）を介してイラストを手で彩色するポショワール技法についての図式による解説が明確に記されている。しかしながらこれは単なるハウツー本ではない。この書籍は著名なアーティストたちのポショワール作品が掲載された豪華な美術書でもあり、歴史的観点からポショワールの価値の向上と次世代への継承の重要さを考察した貴重な論考でもある。出版の目的は 1925 年のパリ万国博覧会に出品したポショワールの展示品に合わせるためのもので、同博覧会は、第一次世界大戦後のフランスの装飾美術や応用美術の祭典であり、アール･デコのフランス美術書の挿絵や建築、インテリア、雑貨の見本としてポショワールの重要性を強調する好機となった。書籍の装丁は、視覚的にもポショワールの魅力を伝える上質なものに仕上げてあり（図 4）、書物愛好家の本と同様に貴重な文献となった。博覧会には 20 か国からの出展者が参加し、1,600 万人以上が足を運んだとされる。この書籍の序文を、同博覧会において大広間のカーペットのテキスタイル制作を担ったエドゥアール・ベネディクトゥスが執筆し、「20 年前、ポショワールは切り文字を繋げるためだけの低俗な道具と見なされていた」と回想する一方で、「新しい芸術の形態や現代芸術家の超高感度な作品を私たちが知ることができるのは、彼の創意と才能によるものである」。と述べソーデの書籍の冒頭を飾った。Fry（1988）によると、ソーデが師事したアンドレ・マルティは、「ソーデがグレニンゲール・エ・フィスの工房でポショワールの教育を受けた先駆者であった」という記述[15]を挙げているが、ソーデはその秀でた才能と巧みな技術をポショワールに注力した。

3-1-2　ポショワール指南書としての書籍の役割

『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』は、ポショワールの歴史[16]（図 5）や技術を図や絵で詳しく示しており、イルミネーターの情報共有、後継者への伝承のための指南書といえる。技術面では塗布する面積によってパトロンの種類や厚みを調整することや、摺り手の得意不得意な色味を考慮すべきこと、絵の具の調合や筆の毛質、絵の具の乗せ方や濃度、持ち手の形状に至るまで知識とノウハウを多数の図解とともに惜しみなく開示している。さらに高度なテクニックとされるグラデーションや点描、スパッタリングを使用したり、直に描画したりとディテールまで実際に再現しており、こと細かに解説している（図 6）。1 つの作品のために 100 枚のパトロンが使用されることもあり、ポショワール作品は豊かで緻密なものに仕

上がる。同書には実際に多数の著名アーティストの作品が彩りを添えている。

ソーデはポショワール彩色のことを「イルミネート（illuminare）」と呼び、自らを「イルミネーター」と称した。この名称は、「イラストレーション（illustration）」に似ているとも記しており、イラストレーターとの親和性を示唆している。ソーデは、イルミネーションの語源はダンテの『神曲』煉獄編 11 章にあると述べている。この章は、12 世紀のイタリアの細密画家オデリージに敬礼をする場面で「L'onor di quell' artech' alluminare è chiamata in Parisi（パリにてイルミネーションと呼ばれる名誉ある技）」ということが記述されている。イルミネーターはソーデのポショワールに対する姿勢や、職人として、さらには巨匠と呼ばれる芸術家としての自負を表していたようだ。

3-1-3　ポショワールについての論考

ソーデは「ポショワールイルミネーターほど、その技法が無視された芸術はないように思われるが、しかし、これほど人気を保ち続けている古い芸術もないことは確かである」と、芸術としてのポショワールの地位の低さを容認する一方で「複製工程において手作業に依存するポショワールは、改変された複製ではなく、真の芸術を可能にする」との示唆を加えた。ポショワールは、すべて手作業で行われるため、「作家の意図を伝えることができる唯一のプロセスである」と考え、手彩色の技法を実証し、複製技術においての優位性を提示した。ポショワールの用途は芸術、版画、細密画、記録画、カタログ、絵葉書、壁飾り、布地など、あらゆるメディアへの対応が可能であり、学問においても博物学、解剖学、民族学、ファッション、

図 4

図 5

図 6

図 7

図 4　Jean Saude *Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir* 表紙装丁
出典：THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY　DIGITAL COLLECTIONS
図 5　Jean Saude *Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir* 歴史・ペルラン社のエピナル版画
出典：THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY　DIGITAL COLLECTIONS
図 6　Jean Saude *Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir* テクニック
出典：THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY　DIGITAL COLLECTIONS
図 7　Jean Saude *Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir* ポショワール “Clair de lune.”
出典：THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY　DIGITAL COLLECTIONS

さらには風刺画シートに関する美しい図像出版物にも一定の価値を与えた。

（図 7）はグラデーションやテクスチャーが顕著な作品のひとつである。当書籍中でソーデは、技術を記述する章において

私たちは、私たちに託したアーティストの奴隷なのだ。私たちは彼の作品を解釈するのではなく、彼が与えたかった色調をすべて再現することに努めているのだ。筆と呼ばれる豚の皮でできた刷毛、ポンポン、ダボなどを、作品の繊細さや重要性によって異なる形や大きさ、用途によって使い分けている（筆者翻訳）。

と、ポショワールイルミネーションという装飾芸術において職人としての姿勢を述べた。一方で、論考を述べる章では彫師と比較して摺師は低賃金労働であることにも言及しつつ、徒弟制度の危機について触れ、職業教育の重要性と有資格者優位性の確立、国家によるファンドの必要性を主張した。

3-2　バルビエが「*Arts et Metiers Graphiques Paris 3*」誌に寄稿した「Pochoir」

3-2-1　バルビエの執筆意図

バルビエは、1910 年代の自身のキャリア初期からソーデによるポショワールのファッションプレートを数多く輩出しているが、1928 年、「*Arts et Metiers Graphiques Paris 3*」誌で「Pochoir」というタイトルの記事を執筆した。この雑誌は 1927 年から 1939 年まで出版された美術工芸（アーツアンドクラフツ）やグラフィックアート、写真を専門とするフランスの隔月刊誌である。バルビエは寄稿した記事の冒頭でソーデへの感謝と賛辞を綴った。

私の最初のドローイングを、巨匠ソーデが驚くほど忠実に型紙で再現してくれたことへの恩返しのつもりである。（中略）最初のプリントは、初恋のように最も美しい。その時、画家は自分の作品の複製を前にして、世の中にデビューする日の夕方、鏡に映る美しくなった自分を発見するまるで若者のような喜びを感じるのである（筆者翻訳）。

続いてポショワールの原型ともいえるエピナル地方の版画（images）への愛着を示し、親近感を表現しているが、ポショワールの職人は多くがエピナルの出身者であった。バルビエが寄稿した頃のパリのポショワール工房は、第一次世界大戦で、戦地に赴いた男性の代わりに女性の働く場所へと転換していった。身体を締め付けていたコルセットを外し、髪を切り、現代的な装いへと変貌を遂げたパリジェンヌが工房で働く姿について、バルビエは、

色彩技術師のためのアトリエには、広い窓から光が差し込む。多くの若い女性が優雅な仕事に没頭している姿ほど美しいものはない。テーブルの上では、色とりどりのポットが花束のようにはじけ、機敏な手が一枚、また一枚と飛び回り、絵の具筆が金型の上を通過していく。なんと魅力的な光景だろう！生き生きとした手、微笑ましい技術、小さなパリジェンヌを際立たせるにはセンスが要求される、なんと幸せな仕事なのだろう（筆者翻訳）。

と、工房の風景を詩的に綴っている。当時の花形イラストレーターであるマルタンやルパップの美しいイラストレーションを手がけることは、「単調なドレスのドレープ作りや帽子のトリミング以上に楽しく幸せな仕事である」とし、低賃金労働の場であるとされる工房の模様を、

図 8

図 9

図 8　Jean Hug *Le Miroir Magique*（ソーデによるポショワール）
出典：Arts et Métiers Graphiques Paris 3
図 9　Jean Hug *Le Miroir Magique*（ソーデによるポショワール）
出典：Arts et Métiers Graphiques Paris 3

抒情的に語り賞賛することで、ポショワールに対しての敬意を示しているとともに巨匠ソーデへの思慮深さを垣間見ることができた。

バルビエは記事中で、ジャンヌ・ブッシェ社から 1927 年に出版されたジャン・ユーゴーの『*Le Miroir Magique*』のために彩色されたソーデの 2 枚のポショワールを記載している（図 8・図 9）。これらの作品に対してバルビエは、「ポショワールの型抜きのためのアタリとして印刷された輪郭線や基準点がなく、アウトラインの黒が構成に重みを与えていない。重なり合った中間色により醸し出されるニュアンスが物語と融合し、色が美しい花の聖杯に注がれるようである」。と評価した上で、ソーデのこの仕事について、「それまで乗り越えられないと思われていた困難を軽々とやってのける匠の技である」。と絶賛した。一方でポショワールは高級書物にふさわしくないと否定的主張する評論家もいることを認めつつも、「印刷は機械的な加工によるやや冷たい転換物である」と反論し、「ポショワールは作家の作品を新鮮な状態で復元するものであり、このプロセスを排除すべきではない」と強調した。

3-2-2　北尾雪坑斎『彩色画選』の研究

バルビエは、日本の版画研究についても言及している。彩色のモチーフとなる鳥や、龍、雲、牡丹、扇子の金型の切り抜きのために細い金属片を髪の毛で留めていることに対して

> *天女たちは、その小さく乾いた機敏な手で、手品師のように巧みにこれらの芸術作品に取り組んでいる*（筆者翻訳）。

と述べ、フランスのポショワール工房で働く「les petites Parisiennes（小さなパリジェンヌ）」と日本の版画工房で働く「les célestes（天女）」を対比している。さらに、バルビエは 1767 年に日本で出版された北尾雪坑斎の『彩色画選』（原文は『Saishiki gwasen』）に触れ、アンリ・ヴェヴェールのコレクションから研究したことを記している。

雪坑斎のこの書籍は、合羽摺と吹きぼかし[17]技法で構成された画集である。合羽摺は、ポショワール同様、型紙となる渋紙を支持体にあてがい、刷毛で着色する技法である。まさにポショワールと基本製法は同様である。渋紙は美濃紙を柿渋で数枚貼り合わせたもので、耐水効果が高く丈夫であったため型紙に適していた。これが水をはじく合羽のような役割を果たしたことからこの技法を合羽摺と呼ぶようになったとされる[18]。木版画のような絵の具を付けた板に支持体を乗せて馬連で擦り付ける技法とは異なり、刷毛の撫で付けによる仕上がりは色が柔らかく、素朴であった。日本国内において合羽摺は浮世絵の木版画ほどポピュラーなものであるとは言い難い。これは浮世絵に見られるような硬質でコントラストの高い鮮やかな彩色によって得られる豪華さが乏しかったためである。しかしながら、バルビエがこの画集をあえて紹介しているのはなぜか。通常、合羽摺に見られる技法は、浮世絵と同様で、まず木版画で基準となる輪郭のための黒い線画を摺り、線画に合わせて型紙を裁断し色ごとに摺りを行う製法であるにもかかわらず、この画集には木版画による輪郭線を作成した形跡が一切見られないというのだ。一枚一枚が、まるで絵師が直に描いたのかと思わせるような仕上がりになっているが、これらはすべて版画であるという（図 10）。この点においてバルビエが焦点を当てた『*Le Miroir Magique*』の技法と酷似しており、いずれも高度な技術が必要とされる。鈴木（2013）によると、『彩色画選』は雪坑斎が絵師として制作主体を担っているとされているが、合羽摺を行ったのは松寿堂という本屋兼業の、合羽摺を駆使するカラーリストであったという。同画集の序文（図 11）には松寿堂が彫りと摺りを行ったと書かれている「こゝに松寿堂の主人紙形を彫、丹青を以て摺（以下略）」。奥付に記載されている渋川大蔵が摺師であろうと鈴木らは推測しているが、整合性は高いと記している（図 12）。この他、販売店が記されており、絵師と摺師、版元の関係が日本ではアール・デコの約 160 年も前から成り立っていたのである。バルビエは雪坑斎の研究について「研究した[19]」という事実以

図 10

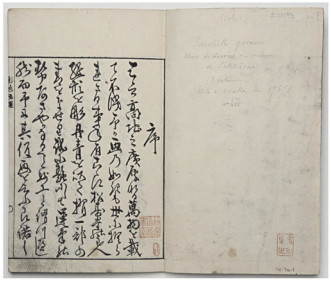

図 11

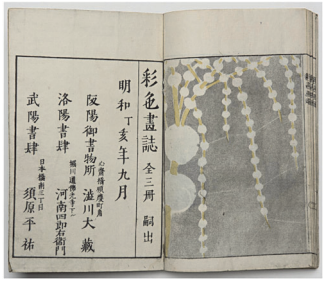

図 12

図 10　北尾雪坑斎『彩色画選』百合図

出典：Philadelphia Museum of Art

図 11　北尾雪坑斎『彩色画選』序文

出典：Philadelphia Museum of Art

図 12　北尾雪坑斎『彩色画選』奥付

出典：Philadelphia Museum of Art

上の詳細は述べていないが、この記事を寄稿することで、ソーデの並外れた匠の技術を賞賛するだけでなく、イラストレーターとポショワール工房の連携、組織化や、安定した販路の拡充の重要性を示唆していたのではないだろうか。寄稿された時期（1928 年）を鑑みれば、ポショワールの斜陽を感じ取っての行動であったようにも思われる。なお、この記事の反響は大きかったらしく、翌号の「*Arts et Métiers Graphiques Paris 4*」誌では「私たちの友人であり協力者であるジョルジュ・バルビエのポショワールに関する素晴らしい記事に対して寄せられた多くの情報への要望に応えるため、私たちはジャン・ソーデの『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』を読者に紹介する以外にない」[20] という謳い文句で、ソーデの書籍の広告が掲載されていた。

4. バルビエの死とポショワールの終焉

Fry（1988）によると、「ポショワールはフランスで最も多く使用された 1920 年代においても、書物愛好家の間では、木版画、エッチング、リトグラフなど、カラーやモノクロの挿絵に使用できる第一級の複製技法として認められるには至らなかった」という。

バルビエが 1932 年、50 歳でこの世を去ったことについて、Martrelli（2009）は「premature death（夭折）」と記し、その死を惜しんだ。制作途中の作品が多数見つかっているが、特に『*Aphrodite*』について、後にルパップが最後まで仕上げて出版にこぎつけるも、この出来栄えを鹿島（2008）は酷評している [21]。バルビエの絶筆について、未完の作品が多数あり [22]、詳細は不明だが、後継者たちが引き継いだポショワール作品はソーデのクオリティを保ってはいなかった。さらに、ポショワールは、1929 年に到来した世界恐慌時代からその勢力を失っていき、スクリーン印刷の発展により衰退していった。機械印刷の技術の革新が目覚ましく、スクリーン印刷でもポショワールの不透明な色彩を再現することができるようになり、短時間で効率よく安価な複製品を生産することが可能となった。Roylance（1999）によれば、ポショワールのイルミネーターは 1 時間に 500 枚程度刷ることができたが、4 色輪転機に比べればはるかに少ない。この頃になると、職人も減り、クオリティも低下して行ったため労働に見合った賃金も得られなくなり、悪循環が一層ポショワール工房を衰勢させることになった。こうして、ポショワールは商業ベースではおこなわれなくなり、版画や書籍の限定版など小規模で行われるのみとなったという [23]。

5. まとめ

バルビエはイラストレーターとしてのキャリアの初期からポショワールを多用してきた。本研究において、まずはポショワールの黎明を確認することで、バルビエが傾倒する経緯を辿った。続いて「*Arts et Métiers Graphiques Paris 3*」誌で執筆した記事「Pochoir」を読み解いた。バルビエは、この記事の中でソーデの匠の技巧を賞賛し、ポショワールが持つ芸術的価値の高さと継承の重要さを訴えた。しかしその文言は決して直接的で強いものではなく、詩的な麗句で綴られており、バルビエのエレガントな作法と紳士の美学が見て取れた。記事の中で

は絵師である北尾雪坑斎の画集『彩色画選』を研究したことを挙げていたが、この画集を通じて合羽摺というポショワールに酷似した技法が複製手段としてアール・デコの約 160 年前から採用されていたことがわかった。さらに絵師と摺師、版元という組織がすでに存在していたことが同画集には記されていることから、組織づくりについてのバルビエの含意が読み取れた。これは、イルミネーターであるソーデが『*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*』で強調した人材の育成や技術の継承の重要性を提示した論考に賛同し、援護する姿勢の表れであった。バルビエのクラフトマンシップに対する尊敬と愛着があったからこそ、現代においてもポショワールによって照らされた鮮やかな造形やその時代の彩りを嘆賞することができる。バルビエが本名であるフランス名の「Georges」をあえて「George」と英語表記にして作品を世に出していることを深読みするならば、バルビエはフランスのみならず、より広い世界で表現し続けることを望んだのだろう。ポショワールとの出会いで自身の活躍の場を複製芸術の中に見出したバルビエと、匠としてポショワールの火を絶やさぬよう尽力したソーデの取り組みには、アーツアンドクラフツ運動の一端が示されている。

注

1） 1988 年にメトロポリタン美術間で開催されたポショワールの展覧会カタログの *Pchoir by Painters* には、サブタイトルに「本、フォリオ、複製、エフェメラ」の表記がある。

2） Vaudoyer, L. Jean（1929）*Les Artistes du Livre* に記載されマルタンによるバルビエの横顔のデッサンが描かれている。その他、Janin, Clément（1929）George Barbier, couturier des muses（*Plaisir de Bibliophile* に記載）を除くとほぼ皆無とされている。

3） Martrelli（2009）*George Barbier: The Birth of Art Deco*

4） Saudé, Jean（1925）*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir*

5） Barbier, George（1928）Pochoir

6） Calahan, April & Zachary, Cassidy（2015）*Fashion and the Art of Pochoir -The Golden Age of Illustration in Paris-*

7） Roylance, Dale（1999）*Art Deco Paris 1900 – 1925*

8） 主に、Fry, R. Charles（1988）*Pochoir by Painters*、Martrelli, Barbara（2009）*George Barbier: The Birth of Art Deco*、Smith, Arthur（2013）*Chevalier du bracelet: George Barbier and His Illustrated Works* を参考とした。

9） ステンシル Artscape https://artscape.jp/artword

10）イギリスを拠点に活動する素性不明のアーティストで、ステンシルを使用して街中や壁面にグラフィティアートを作成している。

11）金沢公子（1998）「エピナールの版画・Image d'Epinal または Imagerie d'Epinal の歴史」

12）クロモリトグラフの仕組み・特徴について https://asobo-design.com/nex/blog-1316-45739.html

13）Smith, Arthur（2013）*Chevalier du bracelet: George Barbier and His Illustrated Works*

14）上掲 [6)]

15）Fry, R. Charles（1988）*Pochoir by Painters*
16）同書によると昔の彩色家はほとんどがヴォージュの出身で、エピナル地方で教育を受けたという記述も見られる。なお、この書籍がエピナル版画の企業であるペルラン社の支援を受けていることも記述されている。
17）吹きぼかしとは、型紙を用いて色を霧状に吹き付けるものでスパッタリング技法のひとつである。
18）矢崎いづみ ら（2006）「合羽摺の技術・表現方法の応用に関する研究」
19）原文：J'ai étudié, dans la collection Vever, un précieux album de Kitao Sekkosaï paru en 1767 : le Saïshiki gwasen, dont les planches sont entièrement colo- riées au pochoir.
20）この作品は、ブルーデル、ルシアン・デカーヴ、セム、ベネディクトゥスによって発表され、20 枚の水彩画が使われており、参考文献としても書物愛好家のための貴重な資料である。限定 500 部、300 フランで販売された。
21）鹿島茂（2012）『鹿島茂コレクション 2 バルビエ×ラブルール - アール・デコ、色彩と線画のイラストレーション -』で「ルパップの絵がひどい出来栄え」と述べた。
22）上掲 [6)]
23）上掲 [5)]

参考文献

アリギエリ , ダンテ・山川丙三郎 訳（1321）『神曲』青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000961/files/4820_20588.html（2022/9/15 最終閲覧）

Art Research Center Ritsumeikan University. https://www.arc.ritsumei.ac.jp/（2022/11/27 最終閲覧）

Arts et Metiers Graphiques Paris 4（1928）https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9691819x（2022/11/10 最終閲覧）

Artscape https://artscape.jp/artword（2022/11/27 最終閲覧）

Barbier, George（1928）Pochoir. *Arts et Metiers Graphiques Paris 3,* p162-163

Calahan, April & Zachary, Cassidy（2015）*Fashion and the Art of Pochoir -The Golden Age of Illustration in Paris-*, Thames&Hudson.

エルコリ , ジュリアーノ・末永航・中條衣訳（1992）『アール・デコのポショワール - 手彩色版画の魅力 -』同朋舎出版

Fry, R. Charles（1988）*Pochoir by Painters,* Thomas J. Watson Library, The Metropolitan Museum.

ギンズバーグ , マドレーヌ・由水常雄 訳（1990）『アール・デコ・コスチューム ジョルジュ・バルビエ』千毟社

Hopkins, L. Michele（2018）*Gazette du Bon Ton: Reconsidering the Materiality of the Fashion*

Publication, The George Washington University Pro Quest Dissertations Publishing. https://www.proquest.com/openview/bfb9c14e6c38bef53b90a37a4c423a29/1?pq-origsite=gscholar&cbl=18750（2022/11/10 最終閲覧）

Iribe, Paul & Barbier, George & Lepape, Georges（1911）*L'Éventail et la fourrure chez Paquin.* https://user-qpwbkti.cld.bz/5ghtqwe（2022/11/26 最終閲覧）

Janin, Clément（1929）George Barbier, couturier des muses, *1929-Plaisir de Bibliophile.* https://www.diktats.com/products/plaisir-de-bibliophile-n-19-20-1929-george-barbier-couturier-des-muses（2022/11/20 最終閲覧）

金沢公子（1998）「エピナールの版画・Image d'Epinal または Imagerie d'Epinal の歴史」『教養論集』14. pp.130-170. 成城大学

関西経済連合会 文化・観光委員会「伝統芸能 Live! / 日本文化情報」https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/japanese-culture/3/post_1.html（2022/12/4 最終閲覧）

鹿島茂（2008）『ジョルジュ・バルビエ画集：永遠のエレガンスを求めて』六耀社

鹿島茂（2012）『鹿島茂コレクション 2 バルビエ×ラブルール - アール・デコ、色彩と線画のイラストレーション -』求龍堂

北尾雪坑斎（1767）『彩色画選』Philadelphia Museum of Art 所蔵 https://philamuseum.org/collection/object/191064（2022/12/4 最終閲覧）

熊谷謙介（2020）「民衆版画の中心地、エピナルのイメージ・ミュージアムを訪ねて」神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター News Letter pp.30-31

クロモリトグラフの仕組み・特徴について https://asobo-design.com/nex/blog-1316-45739.html（2022/11/3 最終閲覧）

Les choses de Paul Poiret, vues par Georges Lepape. https://user-qpwbkti.cld.bz/choses（2022/11/10 最終閲覧）

Martrelli, Barbara（2009）*George Barbier: The Birth of Art Deco,* Marsilio

Petit Atelier Nantais. https://petitateliernantais.com/2018/09/25/les-couleurs-de-lautomne-selon-george-barbier/#more-2246（2022/9/12 最終閲覧）

Proppe, Rebecca. Selling the Art Deco Lifestyle: The Distinction of the Modern Woman in 1920s Fashion Illustration. https://www.academia.edu/18351616/（2022/10/9 最終閲覧）

Ray, N. Gordon & Tanselle, G. Thomas（2002）The Art Deco Book in France. *Bibliographical Society of the University of Virginia*, Volme 55. pp.1-131

Robinson, Julian（1989）*The Fine Art of Fashion: An Illustrated History,* pp.124,125 Harpercollins.

Roylance, Dale（1999）*Art Deco Paris 1900 – 1925,* The Princeton University Library Chronicle. pp.1-72

Saudé, Jean（1924）*Traité d'Enluminure d'Art au Pochoir,* The New York Public Library Digital Collections.

Smith, Arthur（2013）*Chevalier du bracelet: George Barbier and His Illustrated Works,* Thomas Fisher Rare Book Library, University of Toronto.

鈴木淳（2013）「『彩色画選』と松寿堂」浮世絵芸術 国際浮世絵学会 165, pp.19-36

辻ますみ（1990）「J. ソーデ著『ポショワールによる彩色術概説』」文化学園図書館だより 95, pp.3-4

浮世絵文献資料館 https://www.ne.jp/asahi/kato/yoshio/ukiyoeyougo/ha-yougo/yougo-parihaku.html（2022/11/13 閲覧）

海野弘（2011）『優美と幻想のイラストレータージョルジュ・バルビエ』PIE BOOKS

Vaudoyer, L. Jean（1929）George Babier, Les Artistes du Live 10. https://www.edition-originale.com/en/literature/first-and-preciousbooks/vaudoyer-george-barbier-1929-62453（2022/12/3 最終閲覧）

矢崎いづみ・宮崎紀郎・玉垣庸一・桐谷佳惠・小原康裕（2006）「合羽摺の技術・表現方法の応用に関する研究」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』53. pp.456-457

（受付日 : 2022. 12. 10）